

表があった。

3)「社会学者の目から見たアジアや南太平洋でのさつまいも栽培」：農家の畑での栽培テーマだけではなく、経済的に貧しい人の自給自足のための家庭菜園、さつまいもの塊根だけではなく葉ものとしての栽培、などについての発表があった。

4)「さつまいも関係の経済、マーケティングと、その政策」：フィリピン、インド、パプアニューギニア、インドネシアでの小規模農家から大規模農家までのマーケティング問題についての発表があった。

5)「さつまいもの消費、利用法、栄養」：フィリピン、ベトナム、タイ、ネパール、日本での栄養や利用問題についての発表があった。筆者は「日本でのさつまいもの消費と利用」について発表し、日本産のさつまいも加工品も展示した。

6)「さつまいもの研究開発課題の作成」：以上の研究者が上の5つの分野別のこれからの研究テーマを提案した。

アップワードのいくつかの課題

興味深い発表がたくさんあったが、以下、その中のいくつかを紹介したいと思う。

ダグラス・エン博士が中国について述べた意見は、さつまいも品種をもっと多様化すべきであるというものであった。19世紀半ばごろに起こったアイルランドのじゃがいも飢饉と同様なことがさつまいもにも起こる恐れがあると述べた。品種を多く栽培すればするほど、さつまいも栽培が天災に耐える、というのである。

エン博士は太平洋沿岸でさつまいもの品種の調査や収集経験が長い。オーストラリアでは、さつまいもと同種で、塊根を作る品種を

80種程発見し、砂漠でも塊根をつくれる品種を4種程発見したので、ぜひバイオテクノロジーを使い、水不足のところでも栽培できる品種を作って欲しいと述べた。

ジェニファ・ウルフ博士は夜盲症が多い地方では、さつまいもの葉やカロチンが多く含まれた塊根が体に良いので、薬としての役割にもっと注目すべきであると述べた。ウルフ博士の本「Sweet Potato-An Untapped Food Resource」(『さつまいも：生かされていない資源』、ケンブリッジ大学出版部)は1992年2月発行で、世界のさつまいも事情についてたいへん詳しく述べている。

元CIP理事で、アップワードの発起人の一人であるフィリピンのゲリア・カスティヨ博士が、日本の研究者に協力を求めた。それは、日本のさつまいも研究はかなり進んでいるが、さつまいもの葉の、野菜としての品種改良と普及に力を入れて欲しい、ということだった。フィリピンには、おいしいさつまいもの葉の品種がいくつかあるようである。

ヴィルマ・アマンテ氏によれば、フィリピンにおける野菜になるさつまいもの葉の理想的な特徴は紅色、ハート型、無毛、とのことである。

◎引 算

先生「かずお君、あなたの手にある3個のきれいなジャガイモを先生が1つ欲しいと言ったら、手には幾つになりますか」

生徒「はい、3個です」

◎数え方

卵は1個2個……、鶏は1羽2羽……、と数えます。そして美味しいジャガイモは「もう1個、もう2個……」と数えます。

◎家 柄

「私達は高貴なジャガイモです」

「して、貴方がたのお名前は」

「五月女王(メークイン)、伯爵(ワセシロ)、男爵です」 (浅間 和夫)

ポ
テ
ト
・
ジ
ョ
ー
ク